

2022年1月9日（日）／説教者：神谷武宏

説教：「その水をください」

聖書：ヨハネによる福音書4：1～26

この物語の背景には、戦争という悲劇がもたらした差別社会がそこにはある。4節「しかし、サマリアを通らねばならなかった」とあるが、普段ユダヤ人はユダヤからガリラヤへ向かう時、わざわざ迂回してガリラヤに行ったようである。それはユダヤ人がサマリア人を汚れた者とし、差別していたからであった。その差別の原因は、戦争がもたらした悲劇であり、700年前も遡る。当時、分裂した後の北側のイスラエルにアッシリア帝国が攻め国を滅ぼし、生き残った民のうち、上層階級の者たちを強制連行した。その後、近隣諸国から移り住んだ者たちによって異教の神々が入り、また他民族との雑婚が生じて行く。そのことに対し、ユダヤ人は純血を大事にすることから、他民族によって生まれたとされるサマリア人を汚れた者として軽蔑し差別した。しかしイエスは、ユダヤ人が避けて通っていたサマリア地方を「しかし、サマリアを通らねばならなかった」として、ただ単に近道だからではなく、ここにもキリストの渴くことのない福音を知らせるために「通らねばならなかった」のである。イエスは、そのような伝統、風習を自らが打ち破り、神の真理を伝えるお方である。

サマリアの女性は、イエスと向き合う。そして「その水をください」との心の叫びへと導かれる。「ここに汲みに来なくてもいいように、その水をください」とイエスに願う。それは現実逃避である。しかしイエスは、彼女と向き合う中で、逃げたい現実に向き合わせた。現実逃避したい人の思いを、現実に向き合うことへと促され、その現実社会の中で、生きる事を示される。何故か？ ヨハネ福音書19章28節に、十字架上で息を引き取る前に「渴く」とイエスは言う。現実社会の中で生き抜き、神の子でありながら最後まで人として生き抜く姿である。イエスはこの世での渴きを、身を持って経験された。ゆえに、私たちの「その水をください」という現実の渴きをご存じなのだ。

このサマリアの女性は、イエスと出会ったからといって現実から逃げられたのではなかった。いやむしろ、その現実の只中に生きることを新たにされて歩むのである。神が共におられることの恵みによって、生きること、歩みだすことを始める。この世の「その水をください」という「渴き」をご存じである主と共に。  
(神谷)